

## 成長しつづける文庫 - 宮本文庫開設に寄せて -

金沢大学経済学部教授 碓山 洋

このたび金沢大学附属図書館に「宮本文庫」が開設され、9月30日、開設式と記念シンポジウム『共同社会条件の再生と維持可能な社会への課題』が金沢市内で開催された。

シンポジウムの第1部は宮本文庫開設式で、鹿島正裕図書館長から宮本憲一先生に感謝状をお渡ししたほか、資金面で文庫準備を支えていただいた澁谷学術文化スポーツ振興財団を代表して澁谷亮治澁谷工業会長からごあいさつをいただいた。

第2部では宮本先生が「維持可能な社会の政治経済学」と題して記念講演をされ、第3部では寺西俊一教授(一橋大学)、諸富徹准教授(京都大学)、森裕之准教授(立命館大学)ら、宮本先生から大きな学問的影響を受けてきた5名の研究者で宮本先生を囲んで、「維持可能な社会に向けた私たちの課題」をテーマに討論を行った。宮本理論の意義とその継承・発展についてさまざまな意見が出され、充実した討論となった。

宮本憲一先生は、大阪市立大学を定年退官された機会に、蔵書と収集資料の多くを、母校(旧制四高)でありかつて教鞭をとられたこともある金沢大学に寄贈された。立命館大学退職時にも追加の寄贈があり、金大では宮本文庫開設準備委員会を組織し、宮本文庫として公開すべく準備をすすめてきた。

寄贈された図書は約八千点。そのうちとくに価値の高い四千点近くが、今回、公開された。財政学、環境経済学、地域経済学、地方自治論をはじめ、先生の御活躍の領域の広さを反映して、広範囲にわたる蔵書となっている。

これら図書だけでも非常に貴重な文庫である

が、実は、図書以上に、宮本先生が収集された資料類が、学術的にきわめて価値の高いものである。なかでも、「公害の原点」ともいべき水俣病や四日市ぜんそくなど、公害問題の現場に何度も足を運ばれ、「行動する経済学者」として苦勞し入手された資料類は、宮本先生のお仕事の神髄をしめしている。

住民団体の部内資料や、自治体の条例策定過程でつくられた資料、裁判の準備のために作成された資料など、もう他では絶対に入手不可能なものも多く、文字どおり唯一無二の資料群である。

ところが、その膨大さと内容の複雑さから、この資料類の整理・分類が難航をきわめた。同様の資料類の整理の研究をしている財団などとも情報交換したが、こうしたものの分類方法は世界的に未確立だという。それで自分たちなりに試行錯誤を積み重ねながら分類を進めてきたのだが、最近になって、現在とりこんでいる大分類が完了したら、資料類をそのまま写真製版(場合によってはマイクロフィルム化)して出版することを検討したいと名乗りをあげてくれる出版社があった。それで、資料類は近い将来、『宮本憲一収集資料』(仮題)として出版することにし、図書だけを宮本文庫として先行公開することとなったのである。

このように、膨大な量の収集資料の公開に先立って図書のみを公開したのが今回の宮本文庫開設の特徴であるが、実はもうひとつ特徴がある。ご本人が研究活動を終えられてから図書や資料を寄贈され、それが個人の名を冠した文庫となるのが一般的であるが、宮本先生はいまも最前線で活躍されている現役の研究者である。

先生のお手許に置く必要のなくなったものから順次、寄贈いただいております。今後も研究の節目ごとに図書・資料を御寄贈いただくことになっている。宮本文庫はいわば成長しつづける文庫なのである。

宮本文庫の図書は、大学内外のすべての人に

開放されている。近い将来刊行されるであろう『宮本憲一収集資料』とあわせ、宮本先生の研究の足跡にふれるとともに、宮本理論を受け継ぎ発展させるために、また公害問題、環境問題などの解決に役立てるために、ぜひ積極的にご利用いただきたい。



宮本文庫開設記念シンポジウムで学長からの感謝状を贈られる宮本氏  
贈呈者は鹿島正裕図書館長



中央図書館地階書庫に  
配架済みの宮本文庫

〔図書館注〕 宮本文庫は地階書庫に配架されています。学内蔵書検索（OPAC）では、所在が「図宮本文庫」と表示されます。

## 図書館総合展に参加して

2007年11月7日から9日まで横浜で行われた図書館総合展に参加しました。3日目のDRF（デジタル・リポジトリ・フェデレーション）ワークショップ「日本の機関リポジトリ2007」では会場を埋め尽くす参加者の中、第1部基調講演「機関リポジトリの将来像を考える」、第2部DRF参加大学による事例報告、第3パネルディスカッションという構成で機関リポジトリの現状、そしてこれからの課題が報告、議論されました。

第2部の事例報告では、寸劇というユニークなスタイルで機関リポジトリに関する事例が紹介されました。金沢大学からの参加者も役者又は裏方として参加したのですが「機関リポジトリ」という一般にはなじみにくい内容にも拘わらず、寸劇というスタイルをとることによって、

明るい雰囲気の中、聴衆にも理解しやすいものになっていました。機関リポジトリに限らず「図書館の活動を学内に広くアピールする」ということの重要性はこれから益々高まっていくのではないかと思います。寸劇を見て「図書館員のお遊び」と思われた人も中にはいたかもしれませんが、プレゼンテーションの一例としての今回の寸劇は参考にすべき点がたくさんあると感じました。

今回の図書館総合展に参加して、自分が（勉強不足で）知らない図書館をめぐる状況やトレンドを垣間見ることができました。少しでも日々の業務に活かせればと思います。

情報企画課コンテンツ第一係

伊藤 美和